

ものであったのだ。

満州往還

岩手県 武 村 徳 一

六十有余年の人生を振り返って見て、数奇に富んだ人生であったというほどではありませんが、その土地で生まれ育った同じ年代の人と比べていろいろ体験した苦難の時代もありましたが、今それらの過程を振り返って自分の人生は必ずしも不幸だったとは思いません。山あり谷ありの人生の旅ができたと自分としてはむしろ幸せだったと考えています。

満州移住の動機と終戦前後の生活状況

昭和十五年、当時、長野県は国策とはいえ満州移民が盛んで、私の家のように家族が多く農業は小作地が多いところでした。稲作と養蚕を経営の柱として、その合間に水引きもやっていたことをおぼえています。一年中一生懸命に働いても、年の暮れにはいわゆる小

作米、小作料を払わなければなりません。働いても働いても貧乏から抜けられなかったようでした。そのような中で満州移民の話があり、私の記憶では特に祖父（当時六十四歳ぐらい）が乗り気になり、家族を説得したようでした。親戚の強い反対もありましたが移民は決まったのです。結局、祖父が先発隊の一員として、昭和十五年の春、盛大な見送りを受けて出発して行きました。

その後、留守をまもる父母・祖母は、翌昭和十六年春には渡満することが決まっていましたので、その準備に明け暮れていました。

いよいよ昭和十六年、住みなれた故郷を離れるときがきました。私は小学校二年生の終業式を終え、三月の末、親戚の方々をはじめ村長さん、近所の方々、友達から盛大な見送りを受け、住みなれた信州上郷をあとにしました。

叔父叔母や友達との別れはつらく悲しいものもありましたが、私は幼心にも希望と見知らぬ新天地に対する好奇心で胸がいっぱいでした。

三月も末、夢にまで見た満州の現地に着きました。

故郷上郷駅から下関までの汽車の旅、車窓から見た景色、左に瀬戸内の海、右に段々畑に黄色の鮮やかなみかん畑。その風景とはあまりにも違う春もまだ浅い満州。ただ平坦で広々として、沼はまだ凍結しており内地と比べるとあまりにも殺風景なのにちょっと意外に感じました。

吉林省舒蘭県水曲柳崗は、後に知ったのですが、松島移民といひまして、長野県下伊那郡出身の松島親造という方が馬占山將軍の參謀になって、その功績で吉林省内の水曲柳ほか四カ所の土地をもらったそうです。その水曲柳には原野はほとんどなく、現地人が耕作していた畑と、松島さんが連れてきた朝鮮人が開田した水田でした。配分面積は畑十町歩水田一町歩だったと聞きました。

当初入った住居は、満州人が住んでいた住宅に入りました。

水曲柳は第一次の入植が昭和十二年、第二次が昭和十三年、十四年はなく、私たちは第三次昭和十五年の

入植組ということになります。私たち家族は十六年に入地しました。

学校は、水曲柳の駅に近い水曲柳在満国民高等小学校という名称でした。私たちの入植した所は、北隣の平安駅に近く学校までの距離も大分ありましたので、寄宿舎から通学していました。

現地には、満人学校、朝鮮学校とそれぞれ学校がありました。満州人の子弟は学校へ通うことは少なかつたようでした。朝鮮学校では日本語が日常語でした。いずれも、当時は日本人であると子供までが威張り、なにかにつけて上位にありました。

その年の十二月八日、当時という大東亜戦争が始まりました。十七年、十八年と満州でも戦時色が濃くなり、南方の戦果が伝えられ、「やはり日本軍は強い、神国だ」と何も分らない幼心にも日本人として生まれてきたことを、この上もない幸せと感じていたことを覚えていきます。

その後、戦況は段々と厳しくなり、最初にアッツ島の玉砕が伝えられました。実際には、かなり敗色が濃

くなっていたのでしょうが、私たちは勝つことしか信じていません。神国日本、最後は神様が戦勝に導いて下さるのだと思っていました。

そのころ、学校で時局講演会があり、壇上の講師のお話は今でも覚えております。「南方では乳飲み子を背負ったお母さんたちや、働ける子供らまでが、カタツムリを食べながら、ジャングルの中に飛行場を造るため頑張っています。みなさんも頑張ってください。そのうち日本本土は玉砕することになるかもしれない。みなさん、その時は最後の決戦は、ここ満州です」。

私はその話を信じ、「良かった、満州に来ていて」と喜んでいました。後で考えると幼稚だったと思ひ、話をしてくれた人も本当にそのように考えていたのか？と複雑な気持ちになりました。当時私は十二歳でした。

昭和二十年、開拓団の春耕期とともに、兵役のある男性は病弱の人を除き現地応召で、ソ満国境の守備隊要員として駆り出されて行きました。私たち小学生も休校となり、連日種まきから除草の勤勞奉仕に出ました。先生方も手分けして奉仕作業の先頭に立ち、指導

と監督で大変でした。

八月十五日、とうとう敗戦。家族は祖父、祖母、母、病弱の叔父、叔母、私たち四人の兄弟で九人家族でした。父は五月に応召、祖父は中風で寝たきり、病弱の叔父は百羽ぐらいの鶏を飼い、夏は魚釣りぐらいで外の仕事はやっていません。祖母と母はこの先どうなるのかと不安で顔色なく、おどおどした数日が過ぎました。召集された人たちが一人二人と帰ってきましたが、父は帰ってきません。

終戦を境に昨日までの日本人ではありません。敗戦国民、しかも外地での。天と地が逆転したようなものです。私たちの開拓団は、農地も住居も現地人のものを移民団が自分のものにした経緯があります。元々この地に住んでいた人たちにしてみれば、終戦と同時にその恨み反感が爆発するのは当たり前で、それが暴徒化した要因となったのです。

その暴徒にあちらこちらの部落は襲撃され略奪され、私たちの部落へも集まってきました。その頃は、略奪が目的で人身にまでは危害を加えなかったことはよかつ

たのですが、次第に手作りの槍や鎌を持って襲ってくるようになり、不安と恐怖の毎日が続きました。そのような状況の中で、自決するための薬が一人一包ずつ渡されました。

生きる望みを失った人たち数人が、その薬を飲んだのですが、一人も亡くなつた人はいません。薬はなぜか効かなかつたのです。情勢激化する中、私たちの部落、房身崗は、暴徒の襲来を防ぐには不向きということ、東房身崗に移ることとなりました。東房身崗は、周囲の約半分は水田だから、水田の方からの襲撃は少ないので、そちらへ集結することがよいということです。うちでは寝たきりの祖父を残し、部落をあとにしました。

行列を作り屯の門を出ると、外には暴徒が鎌・槍を持って、十重二十重に部落を囲んでおり、私たちは暴徒と目を合わせないように下を向いて逃げるように東房身崗へ向かいました。後ろから鎌や槍で襲われるのではと恐怖の極みでした。

一行はなんとか無事に東房身崗へ着き、分散して世

話になることになりました。次の日は暴徒の影もなく、折を見て同じ房身崗の人たち数人で部落を見に行きました。一番心配した祖父は、布団もとられ、寝間着一枚で冷たいオンドルの上に横になっており、あちこちに隠しておいた衣類は全部無くなっていました。祖父は数人の人たちが交代で背負い連れて帰り、納屋の一部を借りてベッドを作り寝所にしました。

次の日からまた、二百余人が集結した東房身崗の周囲に暴徒が集まってきました。先達の方々は、この悲惨な状況の中で生きのびる策はないものかと日夜協議をしていたようですが、結局、若い人たちは男も女も生き延びるため山奥へ入ることになり、女性は頭を丸め男装し、暴徒に見つからないよう夜陰に乗じて部落を出て行きました。

私たち子供、老人、女は自決することに決まったのです。渡された薬は効かず、結局川へ入ることになり、忘れもしません九月十日、部落から数キロはなれたコラン河に向かって行列が進みました。その年は、雨降り続きで川幅は百メートルぐらいあり、水かさが増し、

すさまじい勢いで渦を巻いて流れていました。ああいよいよ死ぬのかと考えると胸が苦しくなったのを覚えていました。死ぬのは嫌だという思いが強くなっていました。長い行列は、河岸にはまだ二割ぐらいしか着いていません。着いた人も誰一人入る人はいません。

その時です。文字通り運命の分かれ道。馬の蹄の音がして、大きな声で「オーイ、オーイ川に入るな」と叫びながら裸馬にまたがった人が近づいてくるなり「今、平安の警察から、満州にいる蒋介石総統が『日本人の財産は保障できないが命は保障するから自決はするな』と言ったと伝えてくれたからみんな引き返しなさい」という。みんな抱き合ったり手を取り合ったり歓喜の涙を流し、さっき来た道を引き返しました。

部落に帰ってみると、平安の警察の人が銃を肩に掛け五人ぐらいおり、明日は帰国するためここを出発することに、警察の人たちが列車に乗るまで護衛してくれるとのこと。母たちは数日分の携帯食糧を作るのに明け方までかかった。夕方、山へ行ったはずの若い人たちが、三々五々帰ってきました。結局、どこへ

行っても日本人をねらう暴徒がおり、襲撃されて命から逃げ帰るしかなかったようでした。自決をしようとして河岸まで行った人たちも、山へ入って生き延びようとした人たちも、どちらもその目的を果たせなかったことは、引揚げの道程で大変助かり、やはり神様がお助け下さったのだと思いました。

いよいよ出発の朝がきました。わが家にとっては祖父のことが一番気掛かりでした。効かない薬と分かっていても量を増してと、昨夜アメにくるんで食べてもらいました。朝、行ってみると変わりなく「ゆうべの薬は効かなかったなあ」と言っておりました。父がおれば背負って行けるのにと残念でなりません。別れるときのつらさは、今思い出しても残酷なことをしたと悔やまれます。

東房身岡へ集結した人たちの数は確たるものはわかりませんが、およそ二百人あまりだったと思います。ほかの屯にいた人たちにも今日の出発のことは伝達されてきました。平安駅へ向け出発。長い行列は、銃を持った警察に守られて約一時間あまりで駅前に到着。

今でもはっきりと覚えているのは、ほかの屯にいた若妻五人ほどが、腰巻き一つで大きなオッパイをゆさぶりながら素足で私たちの方に向かって逃げてきたということです。そうした間も暴徒がとり巻いて、すきあれば略奪しようとねらっています。

ようやく列車に乗るべくホームに入りましたが、またそこで労働ができる男性と、老人・女・子供とが別々のホームに分けられ、肉親家族が引き離されてしまい、子供はもちろん大人も大声を上げて泣くばかり。上の人たちが警察に懇願し、お金や時計などを賄賂として差し出して、同じ列車に乗ることができました。列車はハルビンに向け発車、途中の駅で武装したソ連兵が数人乗り込んできました。初めて見るソ連兵は恐ろしいものでした。

ハルビンに夕方着き、ホーム脇の荷物倉庫に収容され一夜を明かしました。ぎっしりで座るのがやっと。夜中にソ連兵が女性をねらって入り込み、みんな眠れる状況ではありませんでした。

長い一夜が明けて移動。私たちは東本願寺の幼稚園

だった建物に収容され、ここで二週間、食べる物が少なく、治安は特に悪くありませんでしたが、ひもじい毎日、母乳がでないために亡くなる子供も出始めました。

九月二十七日、南下の指令があり、ハルビン駅から無蓋車に積み込まれて南進、汽車が途中で水や石炭の補給のため停車すると、必ず暴徒が黒山のように待っており、無蓋車をいいことに無防備の私たちからの略奪です。ちょうど天候も悪く雨に降られ、時には満天の星を眺めながらの旅。空のお星様に向かって、どうぞこの私たちをお助け下さいと手を合わせたこともありませんでした。

幾日の旅だったか記憶にありませんが、新京に到着。途中すれ違った列車には、日本の兵隊が乗せられ北へ向かって行きました。あの人たちはソ連軍の捕虜として、シベリアに送られていったのです。

新京は中心地より南の南大房身の軍属の住んでいた官舎、たしか五所帯が一棟の官舎で数十棟並んでいました。やはり食べ物が少なく、ひもじい思いはしまし

たが、周りには暴徒もおらず、いくら落ち着いた気分になりました。そのうちに食糧は紅い高粱こくりんが配給になりましたが、十分ではありません。収穫あとの馬鈴薯畑の土の中から指の先ぐらいの薯、大豆畑のはじけて落ちている豆、アカザの実、口に入るものは何でも食べました。あのころのことを思うと今があまりにも贅沢で、これでよいのかと自問する時もあります。

先達の方々の計らいで、水曲柳からここ新京の南大房身まで逃れてきた人たちは、日本に帰り着くまでは共同生活で助け合っていく体制をとってくれましたので、母親と子供だけの私の家族は本当に助かりました。共同体の名称はその代表者の名前、竹村班という名称でした。今、こうして生きていられるのも、当時皆さんにお世話になり助けられたおかげです。

竹村班は即製の味噌・甘酒を造り販売するようになり、私たちも甘酒を売り歩きました。新京の冬は寒く、枯草、本、空き屋の木材などのペチカでたく可燃物を集めるのも仕事でした。また虱しゅうとりも大事な日課です。五〜六歳ぐらいの小さい子供は虱が媒介する発疹チフ

スにかかり、栄養失調で抵抗力がないので、バタバタと亡くなっていきました。穴を掘ろうとしても土は凍結し、どうしようもなく、冬に亡くなった子供らはコモに丸め雪で覆うだけです。春先には大変な状況でした。

昭和二十一年の春になりましたが、帰国に関する情報はありません。そのころまで支配していたソ連軍が去り、国府軍にかわりましたが、間もなく八路军が攻め込んできて、南大房身の辺りもその戦場となり、家から一步も外へでることができませんでした。銃弾の音が一晚中続き、夜が明けると国府軍の影はなく八路军が進入してきました。新京も完全に毛沢東の支配下になったのです。この戦闘で流れ弾を受け亡くなった人、けがをした人が数人いました。支配者は変わっても日本人難民に対しての処遇は特に変わらなかったように覚えています。

六月に入ってから、待ちに待っていた南大房身地区の日本人の南下の知らせが入り、みんな大喜び、出発は七月はじめ、いよいよその日がきました。南新京駅

から乗車ということで、人数は分かりませんが、長い行列で駅に向かいました。どの人の顔を見ても、皆いよいよ内地に帰れるのだという安堵感が表れていました。

乗車した列車はやはり無蓋車。でも新京まで南下したときのように暴徒の襲来もなく、広大な満州の平野を南進。安泰な旅で錦州に着き、収容所に入りここで約一週間過ごしました。アメリカ軍がいて、身体検査、健康診断、そして虱などの駆除のためDDTを全身にかけてくれ、これで虱ともお別れできました。

錦州をたち、乗船場所の壺蘆島へ。港に着き、久しぶりに見る海とそこに待っている引揚船、船腹に大きな日の丸のついた船を見たときの感激は今でも忘れません。「ああこれで日本へ帰れるのだ」と歓喜の涙があふれてきました。玄界灘を越え、広島の大竹港へ上陸、満五年四カ月目に懐かしい日本に帰って参りました。時は昭和二十一年の七月下旬でした。

一番気掛かりだったのは祖父のことでした。しばらくしてから、九月の末ごろに亡くなり、現地の人たち

が日本人墓地に葬ってくれたと聞きました。

昭和六十一年の八月に墓参団に参加して、四十年ぶりに現地に赴き、墓参りをしてきましたが、日本人墓地だった所は、墓の影はなく馬鈴薯の畑でした。畑にお線香とお供え物をあげて、その土を持ち帰りました。半世紀あまり過ぎた今、特に引揚げの道中で助けられ、お世話になった方々に、この頁をお借りして衷心より厚く御礼申し上げ、筆を置きます。

心の故郷満州・十三年の軌跡

宮城県 鈴木郁子

昭和九年八月初め、私たち親子四人は、父に迎えられ初めて大陸の地、大連の土を踏みました。父四十歳、母三十四歳、兄十歳、私七歳、妹二歳、親子五人の希望に満ちた再会の第一歩でした。それから十三年後、この同じ大連の港から乞食同様の姿で帰国しようとはだれが想像し得たでしょうか。